

## 違星北斗のノートについて

山科清春（違星北斗研究会）

はじめに

2014年9月30日から11月30日までの2ヶ月間、北海道平取町の沙流川歴史館において特別展「平取町ゆかりの歌人 違星北斗・作家 鳩沢佐美夫」が開催されました。

我々「違星北斗研究会」は、この特別展に違星北斗関係の資料協力をさせていただきましたが、その際、同館の森岡健治学芸員に展示内容の概要をお聞きして、大いに驚きました。

違星北斗の自筆の《雑記帳ノート》が展示される、というのです。

札幌の北海道立文学館に所蔵されているという、その「ノート」のことについて、私はそれまで、全く知りませんでした。

違星北斗のノートとしては、1930（昭和5）年に刊行された『違星北斗遺稿 コタン』の編集の際に用いられた12冊のノートについては知られていましたが、それらは3年後に発行元の希望社が解散した際に行方不明になってしまっています。

また、それらとは別に、違星北斗の短歌を記したノートの存在が1925（大正14）年の釧路新聞の記事に示されていますが、それも行方不明であり、80年以上の歳月が経った今では、もはや現存し、再発見される可能性は低いと考えられています。

北斗の自筆雑記帳ノート。

そのようなものが現存しているとは、夢にも思いませんでした。

早速、私は札幌の北海道立文学館に《雑記帳ノート》を閲覧させていただけるようお願いすることにしましたところ、快く許可していただけましたので、その概要について、下に記したいと思います。

### 《違星北斗 大正14年雑記帳ノート》（北海道立文学館所蔵）の概要

北海道立文学館収蔵の、違星北斗の現存する唯一の直筆ノートである《違星北斗 大正14年雑記帳ノート》について、ざっと紹介してみたいと思います。

サイズはB6判、60枚（120P）。

表紙には「Note Book」と印刷され、ノートの製造元などは書かれていません。

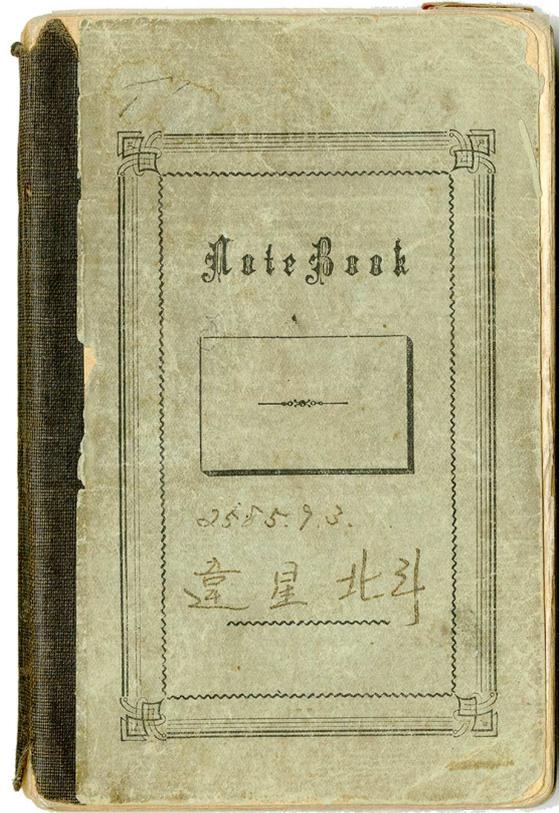
手書きで「2585, 9, 3」（西暦1925年、大正14年、木曜日）という日付とともに「違星北斗」と書かれています（写真1）。

表2（表紙の裏）には「2585, 9, 5」（土曜日）という、表紙の日付の2日後の日付とともに、北斗の住所として「四谷区三光町四六 財団法人 東京府市場協会内 違星北斗」と書かれ、

「違星」の印が押されています。

1 ページ目には、中央に「北斗」をデザイン化した印やその他の印が押しあり、違星家のエカシシロシ(家紋)、他に余市の他の家のエカシシロシに似た意匠のようなものも書かれています。

1 ページのみ、パラフィン紙で保護されています(写真2)。



(写真1)



(写真2)

ノートの中で確認できる日付は、最も新しいものが大正14年11月20日(金)(P113)ですので、使用期間は大正14年9月3日～11月下旬ごろまでかと思われます。

違星北斗が上京したのが大正14年2月ですから、上京後半年を経た頃に使用していたものです。

ノートの上部には《氏名》《俳味》《雑記》《雑用》インデックスタグがついていますが、必ずしもその通りに分類されているわけではありません。1冊のノートで生活から創作、日記まで、なんでも書き込んでいます。

それぞれのインデックスに従って、内容を見て確認してみたいと思います。

### (1) 《氏名》

連絡先の住所録です。P4～12。全57件(一部重複記載あり)。

北斗が東京時代に出会った人々として、金田一京助や柳田国男、中山太郎、蘆田伊人、早川幸太郎などの学者、作家・秋田雨雀のような著名な名前が目をつけます。

俳句誌「にひはり」や「医文学」などの雑誌の出版関係者も名前を連ねています。

北斗の上京の世話をした人々の名前もあります。

元社会主義者で、転向して「自動道話」という修養雑誌の主幹になった西川光二郎。就職先・東京府市場協会の役員で、身元引受人として、家族ぐるみで北斗が世話になった高見沢清。同

期就職の同僚・額田真一の名前もあります。

思想方面では、北斗が私淑した修養団体「希望社」関係者や、セミナーに参加した日蓮系仏教団体・国柱会、それに北斗の祖父・万次郎が明治の初めに「東京留学」した際に、その会場となった芝の増上寺などの宗教関係者。

北斗の日記に出てくる人物であろうと思われる人のフルネームもあります。

変わった所では「青空詩人」として街頭パフォーマンスをしていた永井叔や、日本社製蓄音機合資会社といったものもあり、北斗の広範囲な交流と、その興味の幅に驚かされます。

東京の人物だけでなく、北海道の人々の名前もあります。

帰道後、その仕事を手伝うジョン・バチラーや、訪問して回る白老の医師・高橋房次（コタンのシュバイツァーと呼ばれた名医）、「白老土人学校」の校長・山本儀三郎、アイヌ教育に尽力した吉田巖など。

違星姓の親類や、道内の知人と思しき連絡先も記されています。

その他、どのような人物かわからない名前も多く、今後の研究が必要かと思います。

## （2）《俳味》

北斗は北海道時代から引き続き「にひはり句会」に所属し、上京してからも「にひはり句会」や、その他の句会にも参加していました。

- ・大正 14 年 9 月 8 日（火）「牛込歌楽坂倶楽部」での句会（句題、月・萩・夕立）  
「月」10 句（内 3 句は取消線で削除）、  
「萩」 4 句、選句 5 句、  
「夕立」13 句（内 1 句は取消線で削除）、  
「雑」12 句 秋の風 9 句、その他 11 句
- ・大正 14 年 10 月 2 日（金）「十五夜月見の会 称好塾 句会」4 句
- ・名月を詠んだ俳句 8 句
- ・10 月 24 日（土）俳句 2 句。「秋田文学士 秋田雨雀先生」の文字あり。

ノートには明らかに北斗自身の手によるものと思われる新発見の俳句も多数ありますが、他の参加者の選句をメモしたものも含まれていると見られますので、今後の精査が必要かと思えます。

日時のはっきりしない俳句メモらしきものもあります。

また、俳句ではない散文詩などのメモもあり。

- ・「冷たき北斗」と題した散文詩（歌詞）の草稿。

第一稿（P25）と第二稿（P26）、第三稿「小曲」（P31）があります。第一稿には雪山に行く鹿のイラストが入っています。

## 小曲

- 1 アイヌモシリの  
とををい遠い  
むかし こひしの  
恋ひじややら
- 2 光るは涙か？  
それとも声か？  
澄むほど淋し  
大熊 小熊
- 3 みんなゆめさと  
わすれてゐても  
雲るも涙  
照るさい(え) かなし。
- 4 北のはてなる  
チヌカラ カムイ  
冷めたいみそらに  
まばたいてゐる

これは第三稿です。夜空の北斗星（チヌカラカムイ、大熊座）にアイヌモシリの昔を想う歌であると思われます。

（北斗の筆名には「北斗七星」＝「大熊座」のイメージから、アイヌの信仰の対象であり、北斗の父が狩りの名人であった「熊」に対する想いも含まれていると考えられます）。

他に、「姉の死」についてや上京に際しての「母への思い」を書いた、短歌の原型のような短文もあります。

### （3）《雑記》

講義録のメモ、対話の記録、所感などを書き込んでいます。

#### 1) 講義録・対話のメモ

大正14年2月に上京し、東京府市場協会の仕事を得て、東京で生活を始めた違星北斗。

北海道にいた時には、常に和人からの差別を意識せねばならない生活でしたが、東京ではその苦しみからも開放され、温かい人々に囲まれて、その生涯で最も安定した時期でした。

北斗は仕事が終わった後、夜間に市民講座に通ったり、休日に講演会に通ったりして、勉強に励みました。

ノートにも、東京で受けた講義・講演の講義録や、年長者との対話の内容などの記録が残っており、講義の内容や北斗の所感が書き込まれています。

空いているページにその都度メモしていったのか、順番はバラバラです。

(講演)

講演・講義を時系列で整理すると、次のようになります。

- 9月5日(土) 『南島研究の現状』法学士 柳田国男 (P60-63)
- 9月6日(日) 国柱会『帝大教授 みのべ竜吉(美濃部達吉?)について』 (P63)
- 9月9日(水) 市民講座『経済学』法学士 小林丑五郎 (P64-65)  
『哲学概論』北吟吉 (P66-68)
- 9月13日(日) (国柱会)天業青年団講演会『思想と生活』政治経済主任 田村益喜 (P69)
- 9月16日(水) 市民講座『経済学』法学士 小林丑五郎 (P70)  
『現代の世相』東京府人事相談所主任 法学士 番正雄 (P71)
- 9月23日(水) 市民講座『経済学』法学士 小林丑五郎 (P71-72)
- 9月28日(月) 国柱会『大なる哉聖徳』山川伝之助 (P72)  
『御製講演』田中智学 (P73)
- 9月29日(火) 『御製』巴学 (P74)
- 9月30日(水) 市民講座『経済学』法学士 小林丑五郎 (P75-77)
- 10月31日(土)「天長節奉祝講演会」  
『日本人の宗教生活と生祠の信仰』文学士 加藤玄智 (P40)  
『法国の冥合』大僧正 本田日生 (P41)  
『我国体の特長』文学士 井上哲次郎 (P42)
- 11月3日(火・祝)「明治聖徳記念学会」  
『大邦日本の理想』文学士 大川周明 (P32)  
『宗教的方面より見たる台湾の民族性』文(学士) 丸井圭次郎 (P33)  
『現代的な神社』今岡信一郎 (P34)
- 11月4日(水) 市民講座『日本文化史』帝大史料編纂室 中村孝也 (P35)
- 日時不明(水?) 市民講座『日本文化史』帝大史料編纂室 中村孝也 (P78-82)
- 日時不明 『仏教の根本』駒沢大学教授 今津洪嶽 (P83-86)

その内容は民俗学、歴史、経済学、哲学、仏教、キリスト教と多岐にわたり、とりわけ日本文化や仏教、日本の精神の発揚に関するような講演が多いことに気づきます。

これだけ見ると、この時期の北斗を「右傾化」と見る向きもあるかもしれません。

ですが、北斗は単に盲目的に日本文化や思想に傾いていたわけではありません。次項で紹介する北斗の所感を読んでいくとわかってきます。

(対話メモ)

また、北斗は、東京で出会った多くの人々に、自分の悩みや考えをぶつけました。その対話の感想や所感もノートに書き込んでいます。

9月14日（P54）、27日（P58-59）淀橋医院 伊藤保士医師

北斗とどのような関係か不明。メモの内容からキリスト教の指導者でもあるようです。

9月18日（P55）、24日（P88） 松宮春一郎

出版人で世界文庫刊行会主宰。大正14年3月19日に金田一京助に連れられて参加した第二回東京アイヌ学会で出会っています。以来、北斗の悩みに親身になってくれています。

9月25日（P57）、11月5日（P88）「市原先生」

詳細は不明ですが、メモの内容からキリスト教関係者かと思われます。

10月14日（P89）金田一京助

大正14年2月に東京に出てきて、まず訪ねたのが金田一京助です。その縁で東京アイヌ学会に出席し、それがきっかけとなって、北斗は多くの学者や出版人の知己を得ました。北斗は金田一を頻繁に訪ねては、さまざまな相談をしています。

## 2) 北斗の所感（抜粋）

ノートには、北斗の生々しい心の声が数多く記されています。それぞれが大きな意味を持つものだと思いますが、全ては紹介できませんので、興味深いものを幾つか拾ってみます。

（アイヌ民族の復興について）

9月9日、市民講座のあった日。その帰りでしょうか、電車の中で、こんなことを書いています。

*（14, 9, 9 上野より帰りしな 電車内）*

*静かではあるが平和な祈ではないか*

*沈黙の力強さ…いたいたしくもあり雄々しくもあり おゝ尊いではないか。*

*わたしたちの子供の時代、またその次の時代、が来たとき、ぶちのめされた民族が、こんなに勇敢に立ち上がったことを自慢に語ってきかせたい。この立派な民族をつくりあげたのは俺たちであると言ってきかせたいではないか。この義務と責任を負せられた大正のアイヌは人々の光栄としてうらやむことだと思う（P51）*

北斗は東京で多くの人々と出会い、講演会や市民講座に通い、日本文化や思想、歴史、仏教やキリスト教などの宗教、経済学などを学びましたが、それを盲信したりせず、冷静に、客観的に分析して、「自分はアイヌである、これから自分はアイヌ民族を復興するのだ」という揺るがない姿勢、「これからアイヌを復興する自分自身がどう活かせるのか」という観点で学んでいたように思えます。

また、日時はわかりませんが、次のようなことも書いています。

アイヌは自己の種族を卑下してはいけない。己を卑下してゐ乍ら 他から卑下されたって 腹を立ては いけないのである 己を卑下せない者こそ 他より卑下された時 腹立てることの道理なのである

自己が卑下する様な民族なら 他の民族から 笑はられても いたし方あるまい 卑下すべきものとする者は 笑れても 虐げられても 不平を云う理由ないのである

(中略)

自己を卑下めるの愚を敢えてしてくれるなど云事を絶叫するのである。(P45)

すでに北斗の「アイヌであることを恥じてはいけない」という思想、そして、我等は自覚さへすれば 救れる。生る。植(殖?)る。(P54)

「アイヌであることを自覚し、誇りとせよ」という思想が、上京中から確立されていることがわかります。

(神と自然、「大空」について)

シュウ カントンコロ カムイ

永遠の蒼穹に輝く

人力で世界は三角になるとも

大天は人力をゆるさぬ

おほひなるかな そら

アイヌモシリは 大空の央

(P53)

ノート P53 に掲載されているこの散文詩は、大空詩人と呼ばれた永井叔が出版した『緑光土』に「大空」として掲載され、のちに 84 年に草風館版の『コタン』に採録されています。

北斗の神や自然への考えが、このノートにはいたるところに見られ、その思想の結晶がこの散文詩「大空」であるということがわかります。

和人の友人であり、北斗の死後、遺稿集の編集に携わることになる余市小学校の先生・古田謙二と、北斗はあるとき「神」について長時間談義したことがありました。

クリスチャンである古田の「神は宇宙の上に超越している」という理解に対して、北斗は西田幾多郎『善の研究』の「宇宙の中の働き、そのものの中に神の存在を見る」に同意して、意見の一致を見なかった、ということです。(「古田謙二から湯本喜作への手紙」)。

北斗は、キリスト教の「救いを求められる神」「頼まれて人を救う神」を信じず、またキリスト教に救いを求める同胞に対しても、彼の中では一線を引いて共感しませんでした。

科学は尊い 然れども 自然の理法内に於てのみ 使用されるものであって  
理法内に於て 真理を法則に従しめたことである

絶対に法則を越ゆること出来ないのである

人間の今 定める真理は人間だけの所の定めであってはいけない  
人間が消滅したって真理であらねばならぬことこそ  
科学でも倫理でも人間だけの約束であってはいけない  
宇宙に賛成してもらった実証でなくては  
誰がなんと云ふても人間なんか問題でない様な気がする (P103)

偉大なる人間は また一個人となればホントウに小さなものです  
地球に比べたら小さな塵にも等しいことでせう してみれば地は実に大地である  
しかるに この大地 この三千世界の宇宙の大きさに比べたら 地球の人間に等しく  
宇宙の塵の様な小さなものとなりはてるのである 偉大なるかな大空よと賛嘆せざる  
を得ない  
我等は大地を放れて生きられないと同時に大空の恵を（自然の理法）をはなれて生活  
は出来ないのである  
大空なるかな 大空なるかな  
世界の人種は物質を徹越した大空によって結び合はうではないか  
大地につながり 大空で結び合はうではないか (P105)

北斗は、宇宙、大空、地球の偉大さを讃え、人間の卑小さ、人間の決めたルールのナンセンスさを省みて、この時代に国境を人種も超越したコスモポリタニズムにも似た考えを持っている事がわかります。

北斗の信仰については、大正 14 年 11 月 3 日のメモにも、興味深い記述があります。

祖先崇拝は大生命の自覚であつたとしたら  
私しの祖先崇拝は大日本の天照大神より  
アイヌのエカシの崇拝が重要ではないか  
(P42、下線部はノートでは赤で傍線)

東京で、祖先崇拝は大事である、皇祖神・天照大神を崇拝せよ、という和人向けの講演を聞いた北斗は、それならアイヌである自分はエカシ（古老、翁）の崇拝が大事ではないか。

キリスト教の神や天照大神のような神ではなく、やはり自分にとってはアイヌのエカシ（より伝わる）のアイヌの崇拝が重要である、という発見と読めると思います。

暴力に依らない革化運動が宗教界に現れた 印度のガンジーは二十世紀のキリストであると  
(P42)

といった、ガンジーへの言及もあります。

これ以外にも、様々な北斗の考えのメモや、故郷余市のアイヌ同志からの手紙に対する感想などもありますので、精読し、考察を進めていかねばならないと考えています。

#### (4) 《雑要》

出納記録、会計簿です。

9月8日から11月20日までの日付があります。毎食の食費、電車や省線などの交通費、はがきにインク、電報代。床屋代や下駄の歯や草履の鼻緒、靴の修理、傘など、身だしなみに関するものもあります。詳細に記載。甘い物好きの北斗らしく、氷水（かき氷）やジュースなどのスイーツも記載があります。

10月10日には、中里君上京、という記述もあります。「中里君」は余市の幼なじみ、中里篤治。余市の実力者中里徳太郎の息子で、北斗のいところでもある、のちに同人誌「コタン」を一緒に編集する人物です。その後に写真を撮っています。金田一京助の随筆集『心の小道』に坊主頭、労働服の北斗と篤治と一緒に写っている写真が一枚残っていますので、おそらくこの時に撮ったものでしょう。

11月20日には木村洋服店で19円使っています。北斗の写真には労働服のものと背広のものが残っていますので、このタイミングで背広を買ったのかもしれない。

#### (5) その他

##### 1) 短歌4首

東京時代の北斗はまだ俳句がメインで、あまり短歌を詠んでいません。このノートに見られるのは4首のみです。

「天地に伸よ栄よ誠となるアイヌの為に気を挙げんかな」

「余市川その源は清水なれひんもなくにごる川下」

「はしたなきアイヌなれども たぐひなき国に生れ幸思ふかな」

「我アイヌ此の表白に耻なかれ 同じ日の本□子にしあれば」(P102)

これらの短歌は、東京時代の北斗の思想や信条をよく表していると思います。

アイヌである自覚と誇りを持ち、アイヌの民族復興のためにその生涯をささげたい。栄えある日本社会の一員として、和人と伍して劣らぬ立派な人物となり、「滅び行く者」とまで言われたアイヌ民族の、社会の中での地位を向上させたい。

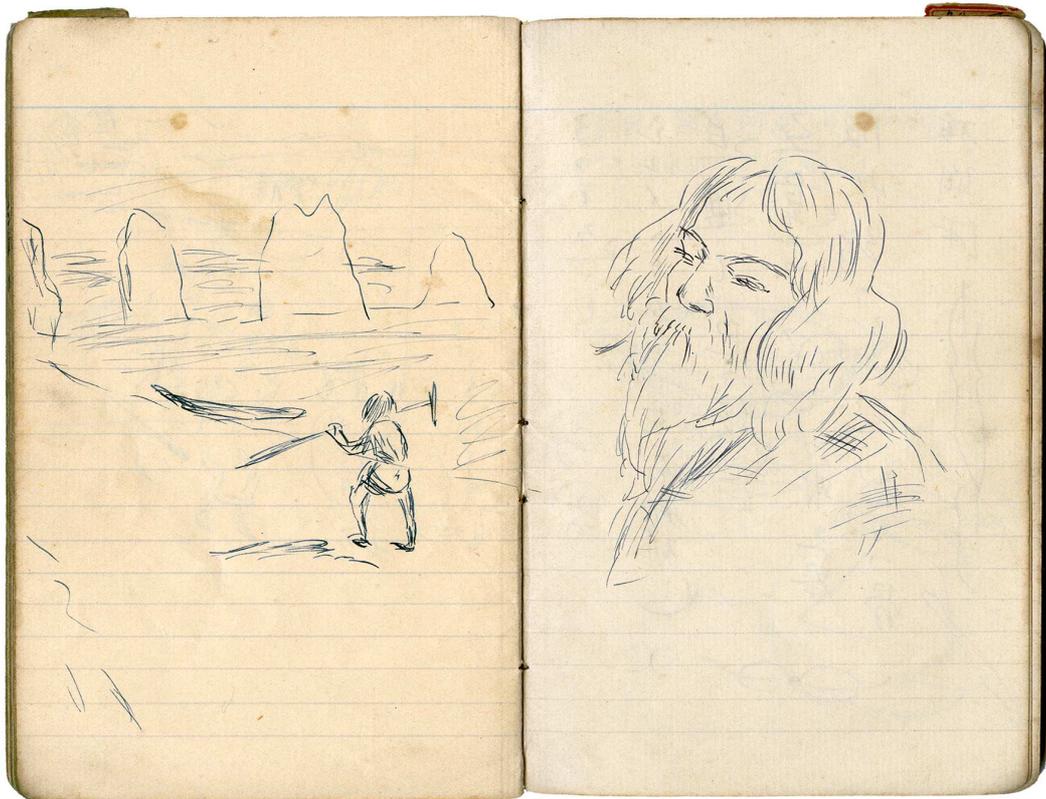
アイヌの民族精神の発露と、自らが属する社会（日本）への讃美は、この当時の社会状況の中で決して矛盾するものではないと考えるべきだと思います。

##### 2) イラスト

ノートには、アイヌの風俗を描いた絵も描きこまれています（写真3、4）。



(写真3) コタンで踊る人々 (P90-91)



(写真4) 海岸をゆく男 (P92)・エカシの顔 (P93)

・他に土器などの絵 (P94) もあります。

3) 札幌県令口述書等、三県時代の史料書き写し (P96)

北斗は、祖父の「東京留学」についても調べていたようで、ノートの連絡先にも、増上寺関係者のものがあります。

明治初期、北海道開拓使がアイヌの若者を東京に連れて来て、芝・増上寺に設置した「開拓使仮学校」で教育を受けさせた、ということがあり、北斗の祖父・万次郎はその中の一人でした。

この施策については、様々な問題があったと思いますが、北斗の祖父は成績優秀で、その後、道庁に雇用されており、万次郎自身もそれが誇りであったようで、北斗ら孫たちに東京時代の思い出を語りました。

北斗の東京への憧れも、この祖父の体験に由来しているものだと考えられます。

#### 4) メモ

その他、スピーチ台本と思われる文章構成案 (P104) や、アイヌ文様に関するメモ (P94)、北斗が務めていた東京府市場協会での仕事上のメモ (P111) などもあります。

おわりに

今回、違星北斗の肉筆の雑記帳ノートを通読しましたが、まだまだ精読の必要があると考えています。

私にとって一番の発見だったのは、北斗の散文詩「大空」の思想的背景がはっきりしたことです。北斗の「大空」や「宇宙」、「自然」「大地」への想いと敬意と、「救う」「救われる」というキリスト教の神への違和感が語られており、その後の北斗の宗教観に関わる発言につながるものだと思います。

また、北斗の東京時代の作品に現れる「日本讚美」的な発言と、アイヌ民族復興への思想が両立することの背景が、北斗自身の独白として提示されており、より精密に考察する必要があると思います。

今回、紹介できた北斗の言葉はほんの一部です。新発見の「小曲 (冷たき北斗)」や、多くの俳句もあり、出来ることなら今回みつかった資料を反映した遺稿集が編まれ、幅広い研究が行われることが望まれます。

(了)